

<随想>彷徨する栄華：敦煌とトゥルファン のこと

安藤, 信廣 / ANDO, Nobuhiro

(出版者 / Publisher)

法政大学国文学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

日本文学誌要

(巻 / Volume)

27

(開始ページ / Start Page)

83

(終了ページ / End Page)

84

(発行年 / Year)

1982-12-05

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00019352>

彷徨する栄華

— 敦煌とトウルファンのこと —

九月八日、敦煌の莫高窟を初めて訪れた朝、その上の鳴沙山に登って見た。そこからぐるりを見つめているうち、ふいに「これは地平線を持った文明なのだ」と思った。東側は朝日に照りつけられた三危山の山並みが鉱物質に輝やき、南から西にかけては、鳴沙山が大きな波をそのまま砂にしたような姿で連なっている。そして北側を向くと、視野に入るのはひたすらに地平線まで続く砂の世界だった。

立ちつくしていると、「中国」とか「中華」とかいうのは、開闢以来この地平線を見つめて来た民族とその文明の自意識を表した、鮮やかな言葉だったように思われて来た。地平線はこの世界の果てであると同時に、別の世界の始まりでもある。それは、この文明の果ての更に向こうに存在する異質の文明と異形の間を物語り、しかもそれが地続きに存在していることを語る。だからこそ、多くの文明の中心としての「中国」という自己認識があり得たのだろう。「豊葦原中国」というのが、天上の高原と地下の黄泉の国との真中にある国の意であって、どうも水平線の彼方の世界をあまり顧慮していないらしいのと、それはすこし違う意識構造だったような

気がする。

それからしばらく鳴沙山の上を歩き、楽傳という行者のことを考えた。前秦の建元二年（三六六）、ここに始めて石窟を掘ったというこの僧侶は、ヨハネに似た人ではなかったかなと何故ともなく思った。「なんぢは誰なるか」「なんぢ己につきて何と言ふか」とつめ寄るパリサイ人に向かって、「我は預言者イザヤの云へるが如く『主の道を直くせよと、荒野に呼はる者の声』なり」と答えたヨハネに、どこか楽傳は似ている。

楽傳は鳴沙山東端の南北一六〇〇メートルにわたる断崖のどこかに石窟を掘ると、そこに住み修行したという。すると、彼が最初に開いた窟は、礼拝を目的とするチャイティア式窟（塔廟窟）ではなく、多分住居と修業場を兼ねるヴィハーラ式窟（僧院窟）だったということになる。それも彼一人がようやく入って起居できる程度の小さなものだったに違いない。そうなると楽傳は断崖の中腹に東を向いて座していることが多かっただろう。彼は神秘的に輝やく岩山の三危山を見るために、そうしつづつ瞑想するために、鳴沙山の断崖に小さな石窟を掘ったような気がする。つまり、善男善女が聖地とし

安藤信広

て巡礼する鳴沙山は、本当は聖地の全てではなく、案傳の聖地はむしろ、大泉河を隔てて東に対峙する三危山だったのでなかったか。

案内をして下さった中国国際旅行社蘭州分社の徐紅さんは、「案傳は、三危山の上が光って千仏が並んで立つのを見て、この地に石窟を開いた」と言っておられた。今度始めて知っただけけれど、三危山と鳴沙山の北側の沙漠には、魏晋以来の古い墓群が広がっている。この古墓群は、案傳の開窟よりも古いわけだ。それなら、ここは仏教以前からの霊場だったのであって、古くから生と死の境界と考えられて来たのだろう。荒野を彷徨してこの地に辿り着いた案傳は、太古以来ここに満ち満ちている神霊の氣に打たれたのだ。ただその神霊は新しい神、つまり林立する千仏の姿となって現われたらしい。古来の靈氣を感じながら、そこに新しい神である仏を見る目は、旧約の最後の預言者であると同時に新約の最初の行者でもあったヨハネのまなざしに似ていないか。

九月十二日、午後三時にトゥルファン（吐魯番）近郊の葡萄谷を小型バスで出発して、六時半頃ウルムチ（烏魯木齊）市街に入った。トゥルファンから七〇キロ程で砂漠は終わり、それからの一二〇キロ程は白楊河に沿う緑豊かな地帯と草原地帯だった。天山山脈を三時間半で越えたのだ。

一昨年、文学部の紀要に『駱賓王試論』という拙文を載せた。初唐の詩人駱賓王（六四〇？―六八四？）についての文章だが、その中で『晩に天山を度えて京邑を懐うこと有り』という詩に触れ、「詩題に言う『天山』がどこなのかははっきり確定しきれない」と書

いた。だが、「天山」は天山山脈でよかったようだ。そして駱賓王が降りしきる雪の中を山越えした地点は、九月十二日に僕が小型バスで通ったルートと考えてきつと間違いない。彼は天山山脈をボグダ（博格達）山系の西の地帯に沿ってトゥルファンの側からジュンガル盆地の側へ越えたのだろう。

山越えの地点を暗示する言葉が、実は詩の中にあることはあった。

交河浮絶塞 交河は絶塞を浮かべ

弱水浸流沙 弱水は流沙を浸す

交河というのがトゥルファン郊外にある二つの川の交点で、古代そこに交河城があったということは分かっていた。でも僕は、「交河が孤絶した塞を浮かべている」という表現を疑った。実際に見てもいない場所を、それらしく誇張して描いてるのではないかと。

ところが九月十一日の夕方、その交河城の廢墟に立った時、「交河浮絶塞」というのがまぎれもなくこの地を目で見た者の表現であることを、思い知った。交河故城は二つの川の真中に、軍艦のように浮かんでいた。高さ十数メートルの垂直な絶壁で囲まれた台地上に、人々は都市そのものを掘り下げるといふ厄介な著想を得たらしい。メイン・ストリートも、家も、牢獄も、城門も、全てが台地を抉り削って作られていた。だから、この台地そのものが都市であり「絶塞」なのだ。すこしく修復された仏塔の上に立つてこの都市の累累たる廢墟を眺めた時、呆れた。そして中国文学を研究するということ、空恐ろしく思った。駱賓王は七世紀の中葉、はなやぐこの絶域の都市に立ち、ここから天山を越えたのだ。今ではそれを信ずる。

（文学部助教）